

# Muse

帝国データバンク史料館だより【ミューズ】

2009.04  
VOL.08  
TDB Historical Museum

関東大震災1周年を期して所員から提出された所感を綴った「震災手記」。ここには復興への決意や想いが記されている

古往今来〈特別論談〉

## 良い社史が 企業経営にもたらす力

青山学院大学経済学部教授 田付 茉莉子さん

TDB交親録 ゆかりの人物——交流と親交の記録  
喜劇の元祖「曾我廼家 五郎」

日本の産業創世記  
近代化と戦後復興の原動力「石炭鉱業」

シリーズ：史料との対話  
「震災手記」に見る 復興への想い

特別論談

良い社史が  
企業経営に  
もたらす力



青山学院大学  
経済学部教授  
田付 茉莉子さん [たつき まりこ]

東京大学経済学部卒、同大学経済研究科修士課程修了、同博士課程単位取得。(財)日本経営史研究所専務理事。同所の優秀会社史選考委員を務める傍ら、自ら執筆に携わった社史で数多くの優秀会社史賞を受賞

1 最近の社史の傾向

読みやすさを追求するあまり  
軽い社史づくりの傾向が

最近ではCD-ROMやDVDなど、読みやすさ、見やすさに主眼を置いたものが増えてきました。同時に情報量が極めて減ってきています。デジタル媒体の社史を作る場合も、やはりきちんとした社史があつて、それを基盤としたものでなければいけません。位置づけを超えることはできないと思

社員に会社のことを理解してもらえれば良い

といった軽い漠然とした目的だけでなく、社史づくり本来の軸を見失ってしまう恐



れがあります。例えば、社史や経営理念は時代の変化を踏まえて変わってきたものの、現在のものが創業時からのもので、上に扱われる、その結果経営が極めて保守的になるといったことが出てくるかも知れません。こうした状況に陥らないように、社史づくりの本来の目的に沿った良い社史をつくっていただくこと、優秀会社史賞の使命はそこにあるのではないかと思います。

2 良い社史づくりとは

しっかりした資料収集に基づいて  
客観的な評価に耐えられるものを

社史というものは、その会社の歴史を正確に、資料的な価値がきちんと残るように記述しなければなりません。つまり、10年後、20年後の歴史的な評価に耐えうるものであると同時に、判断基準になりうるものでなければなりません。「温故知新」に役立つものということでしょうか。

最近の経営者は、よく「暗黙知」という言葉を使いますが、暗黙ではなくはつきりした形や言葉にしなければ「知」は共有できないのではないのでしょうか。企業の風土や理念といったものも、歴史的な軸の中で練られ継承されてきたものですから、そういう背景がきちんと表現されているのが良い社史だと言えます。

この良い社史づくりのための要件を挙げると、まず第一に資料やデータを収集し、時代の証言を収録すること。資料収集にはオーラル・ヒストリーも含まれます。書類などの資料だけでは、事業の背景は決して分かりません。その事業に携わった人がどのよう

に時代を認識し、どのように仕事のグラウンドデザインをつくっていったか。実際に話を聞くことも欠かすことのできない大切な資料収集の一環です。  
商船三井が「百年史」をつくったときは、合併前の「大阪商船」と「三井船舶」にそれぞれ「八十年史」があつたのですが、その後20年間で空白で資料集めに非常に苦労した経験があります。それ以降、同社では5年おきに社内を一巡して資料集めやヒアリングを継続してきました。先日「百二十年史」をつくった時は、この資料が蓄積されていきましたので、資料集めはスムーズでした。つまり、何周年という節目を前にして何十年間もの資料をまとめて集めるのではなく、継続的な資料収集の努力が必要なのです。

第二の要件は客観的な評価です。そのためには失敗の歴史も恐れずに書く、ということが重要です。また、日本経済や業界の動きとの関連を明らかにして、会社や事業を客観的に位置づけることも忘れてはなりません。

三井銀行の「八十年史」はもうだいぶ古いものですが、両替商から銀行になり、つづれかけたこともある銀行経営の大問題などが数字も含めてきつちりと収録されています。客観的な事実を知り、事業を正しく評

独自の経営風土や長寿企業の多さを背景として、日本には「社史編纂」という独特の社史文化が定着している。近年は百年周年を迎える企業も多く、記念事業としての社史編纂もますます盛んだ。  
しかし、編纂には多くの時間と費用も必要だ。単に記念としてだけでなく、また、企業の歴史を留めるといふ機能を越えて、有用な力のある社史づくりという視点が欠かせない。それが可能な「良い社史づくり」には何が必要か。優秀社史の選考や多くの社史執筆に携わる青山学院大学経済学部の田付茉莉子教授にそのポイントを語ってもらった。

価できる良い社史の代表例だと思います。

最後の要件は、読者が読みやすく、分かりやすい表現と編集に努めること。社史がある程度のボリュームと難しい内容を持つことは避けられないことですが、そのなかでもストーリー性を持たせる、資料は巻末か別巻にまとめる、あるいは持つて歩ける普及版の編集など、いろんな工夫によって、レベルを落とさずに読みやすい社史をつくることができます。

### 3 社史がもたらす効果

#### 温故知新のバイブルとして 経営者を育てる教材として

現在、百年に一度の金融危機に直面していると言われます。こういう混乱した時代になると、1929年の世界大恐慌の経験がたくさん引き合いに出されます。歴史に学ぶ、ということでしょうか。大恐慌当時は、世界経済のあり方が今とはまったく違うわけですから、同じことが繰り返されることはないのですが、企業の対応や経営姿勢については、振り返って反省することができます。

近年では、日本はバブル崩壊という経験をしています。この経験が社史に客観的に記述されていれば、好況のピーク時に企業がどこで状況が見えなくなっただけで判断を間違えたか、ピークが崩壊したときにそれがどういった影響をもたらしたか、その対応と処理のためにどんな苦労があったかがはっきりわかります。再びこういうことが

起こった

ときに、

企業は判断しやすくなりま

すね。実際に「よ

その会社はどうしてバブルの経験を学んでいないのだろう」と言っている企業があります。あのとこの経験を社内で検証し、消化している企業は今回の危機に際してもあまり慌てていないでしょう。

また、最近では株主の要望が強くなってきました。企業が経営の重要な意思決定を行うときに、株主に対して目先の利益や風潮に流されることなく決断するための判断材料として、また、理論武装の手段としても社史は大きな力になるのではないのでしょうか。

一般的に社史を編纂する目的は、企業の歴史を記述するなかで、客観的に自社の位置づけを知る、それをきちんと社員に伝える、幹部候補生の教育にも役立つということです。私が社史の編纂をお受けするときは、どの層の社員に向けて書くかという、社内教育の観点を意識しています。

本格的な社史は、課長、部長などレベルの高い研修で役立ちます。日本では、まだ欧米のように外から経営者が入ってきていきなり経営陣が入れ替わることはありません。基本的に経営者は社内で育っています。とな



社史(「創社史」)と良い代表例に挙げた「三井銀行八十年史」(帝国データバンク史料館分館所蔵)より、田付先生が執筆した大阪商船三井船舶株式会社(現・商船三井)、『旭化成八十年史』(現・旭化成)と良い代表例に挙げた「三井銀行八十年史」(帝国データバンク史料館分館所蔵)より、田付先生が執筆した大阪商船三井船舶株式会社(現・商船三井)、『旭化成八十年史』(現・旭化成)と良い代表例に挙げた「三井銀行八十年史」(帝国データバンク史料館分館所蔵)

ると、自分の会社の社会的役割を客観的に判断するトレーニングが非常に重要で、同じ社内にも、部署が違っても、部署が違っても見ている

ディメンションが違います。自分の歩んできたキャリアの範囲内では判断ができていたのでは困ります。会社全体を見渡せる能力は、優れた経営者に成長していくためには絶対に必要です。最近では以前のようにいろんな部署を経験させることは少なくなってきました。営業畑一本、企画畑一本というように専門家を育てるほうが良いという、早く育てることに主眼を置いてジェネラリストは要らないという企業が随分あります。自社の全貌を客観的に見渡せるまとまった材料は、社史のほかにはあまりないのです。

### 4 高まる社史の必要性

#### グローバル化が進む中で 企業のアイデンティティを

現代の経済社会は目まぐるしい変貌を続けています。グローバル経済が進展するなかで企業は統合が進んでいます。市場もますます海外に依存してきました。社史を通して統合前の各企業のアイデンティティや、日本の企業であるというアイデンティティを

はっきりと持ち続けていくことが欲しいものです。

また、社員の企業への帰属意識や誇りといったものも希薄になってきています。ダイキン工業では2006年に発行した「80年史」の表紙カバーに極めて挑戦的な帯を付けて社員に配りました。その帯は「10年後の君は何をしているか」という問いかけで、社員に感想文を出させたのです。感想文で最も多かったのが「社史を読んで自分の勤めている会社をより深く理解でき、会社に対する誇りが持てた」というものでした。また、中国語版を読んだ中国人の社員から「ダイキンのDNAがよく分かった、企業文化を伝承するよいツールになる」という感想も寄せられました。従業員の会社に対するロイヤリティが非常に高まった、という好例です。

経済や社会が急激に変貌するなかで、社史の必要性は大きく増してきているのではないのでしょうか。



日本で初めて喜劇を興し、やがて大阪、東京の舞台で喜劇王の名を欲しいままにした曾我廼家五郎。

自ら書き下ろした脚本の多くが雑誌『日本魂』に残っている。この雑誌は帝国データバンク創業者・後藤武夫が結成した思想結社「日本魂社」の機関誌である。ここから五郎と武夫の親交ぶりが浮かび上がってくる。

## 日本初の喜劇「無筆の号外」は 日露戦争開戦の翌日に生まれた

日本の喜劇は曾我廼家五郎、曾我廼家十郎が興した「曾我廼家兄弟劇」が1904（明治37）年、初めて「喜劇」をうたった演目を上演したことに始まる。

曾我廼家五郎、本名和田久一は1877（明治10）年、大阪堺の宿院町に生まれた。7歳で父を亡くし、13歳で母と大阪に出て煙草問屋に丁稚奉公するが、2年後に歌舞伎役者の中村珊瑚郎に弟子入りし、中村珊瑚之助を名乗った。初舞台はその翌年、大阪道頓堀の浪花座であった。

一方、曾我廼家十郎は本名大松福松。69年、伊勢松坂の生まれで、五郎より8歳年長であった。五郎と十郎は後に「曾我廼家兄弟

劇」を旗揚げするが、二人は実の兄弟ではない。十郎も歌舞伎役者・中村時蔵に入門し、中村時代という芸名を名乗った。

その二人が1902（明治35）年、大阪の福井座で出合い意気投合する。珊之助26歳、時代34歳のことであった。

翌年、珊之助は大阪千日前の改良座で鶴屋団十郎一座の「俄（にわか）」を観た。「俄」とは世相などをおもしろおかしく即興で演じるもので、江戸後期から上方で流行っていた。珊之助はこの「俄」がヒントとなって喜劇という新しい演劇を思いつく。すでに歌舞伎役者をあきらめて伊勢松坂に戻っていた時代を呼び戻して、04年2月11日、大阪道頓堀浪花座で「曾我廼家兄弟劇」を立ち上げた。珊之助は五郎を、時代は十郎を名乗った。曾我廼家という座名は、当時の人気歌舞伎役者であった曾我兄弟にあやかったものだという。

初日の演目は「式三番叟」「引抜きだんまり」「狒狒退治」「滑稽勧進帳」という喜劇であった。しかし、前日10日、日露戦争が勃発して街中に号外の鈴の音が鳴り響き、世間は芝居どころではなく、客は入らなかつた。



歌舞伎の大部屋役者だった二人は一座を抜け、喜劇という新しい演劇を世に出した。左が五郎、右が十郎。恵木永氏所蔵

そこで五郎は開戦を伝える号外を題材とした喜劇「無筆の号外」をわずか1日で書き上げた。無筆とは、文字の読み書きができないことを言う。

——新しく開店した洋食屋の宣伝ビラが長屋に配られた。字が読めないために、住人たちは戦争の号外と勘違いし、洋食屋の主をロシアのスパイ、メニエーを敵将の名前と思いついで注文した料理をガチャンガチャンと皿ごと叩きつけて割ってしまう——

これが爆発的にヒットして、浪花座は連日満員の盛況を博した。世相を反映したこの喜劇は派手なパフォーマンスも手伝って、口コミで伝わっていたのである。

この「無筆の号外」こそが、日本の喜劇の元祖とされている。

05年4月には、東京への進出も果たし新富座で初公演を行った。10年には大阪、中の芝居で60日間の大入りを続けた。「曾我廼

家兄弟劇」はこの頃には東京でも満員の盛況ぶりを示すようになっていた。

しかし、二人の芸風の違いから14（大正3）年、一座は「五郎一座」「十郎一座」に分裂してしまう。以降は、それぞれ独自の道を歩むことになるが、この大正期には他の多くの喜劇一座が旗揚げし、21年ごろに喜劇は全盛時代を迎えている。五郎一座は東京での公演も多く、23年9月1日の関東大震災時には東京新富座で被災し、丸の内の和田倉門まで逃げ延びたという。

五郎はその後も笑えて泣かせる喜劇王の名を欲しいままにし、36（昭和11）年には所得番付日本一の座についた。

## 雑誌『日本魂』、喜劇全盛の時代に 五郎の脚本を91号にわたって掲載

曾我廼家五郎は一座の演目の脚本を自ら書いていた。筆名を二塚漁人という。生涯に残した脚本は千本以上と言われている。この五郎劇の脚本が、『日本魂』に数多く掲載されている。現在判明している限りでは、掲載期間は1922（大正11）年10月号から34（昭和9）年10月号までの12年1カ月間であるが、前述のとおりこの時期は喜劇の最盛期であった。

23年4月の帝国興信所社内報「脱俗」に五郎と後藤武夫との関わりを示す記事がある。この号の所長訓示のなかで「曾我廼家五郎君は、矢張り我々同様正しき努力を主義とする人でありませう」と紹介している。続いて、この年の東京本社の年中行事として開催された曾我廼家喜劇の観劇会の記事が

## 喜劇の元祖

# 曾我廼家五郎

舞台上に招き、自宅に招かれ——

帝国データバンク創業者・後藤武夫との親交。



写真提供：毎日新聞社

載っている。観劇会は3月28日、明治座公演の千秋楽に行われた。腹の筋がよじれるような面白さとともに、五郎を「大日本努力会の幹事たる和田久一君」と本名で紹介し、同会の幹事長・後藤武夫から花輪が贈られた、とあり二人がこの同じ教化団体に属していたことがわかる。

もうひとつ、『日本魂』に連載された脚本のなかに五郎と後藤武夫との親交ぶりを示すものがある。26年5月号に「八家の地蔵」(喜劇一場)というタイトルに続いて後藤武夫の「見たままの記」が掲載されている。

「去一月邦楽座に開演中であつた曾我廼家五郎氏から、今回初めて東都の舞台上に上演する本劇を是非観て欲しいとの案内に接した。早速見物に出掛けたところ、実に面白い内容と云ひ、演出法と云ひ、確かに感嘆に値する劇であつた。浅薄なる科学文明心酔者が、卒然として信仰的奇蹟に遭逢し、忽ち心気二転、精神文明の讚美者となり、皇室中心主義の高唱者となつて、敬神崇佛を力説するに至る顛末は、充実緊張せる同氏一座の熱誠を籠めた演出により、愈々精彩を放ち、近來稀とも云つて良い程見徹へがあつた。(中略)ともかく国民精神作興を標榜する我等は、この感銘を此の儘独占したくない。



『日本魂』(1926年5月号) 曾我廼家五郎の脚本に、後藤武夫が「見たままの記」を掲載。武夫が五郎から「本劇を是非観て欲しい」と頼まれたとある

記憶を辿りつつ、本劇の展開する有様を出来るだけ巨細に記述し、以て読者諸君の一察に供する次第である」

この演目は、漁村の産婦人科に赴任してきた医者夫婦が、八家の地蔵という子宝地蔵を信奉する村民にあきれおののだが、実は一人はこのお地蔵さまの申し子だったという話である。後藤武夫は大層気に入っていたようで、91回を数える脚本の連載のなかでこの演目以外に自ら感想や推薦を述べたものはない。

### 日本魂社創立15周年式典で一座が「五兵衛と六兵衛」を演じる

1931(昭和6)年、「日本魂社」は創立15周年を迎えた。その記念大会が4月29日、東京日比谷公会堂で挙行された。当日の来賓客は元内閣総理大臣・清浦圭吾、東京市長・永田秀次郎を始め約3千人。また時の内閣総理大臣・若槻禮次郎を始め現職大臣、日本銀行総裁など錚々たる顔ぶれからの祝辞が披露されるといふ盛大なものであつた。

この記念大会の余興として曾我廼家五郎一座の「五兵衛と六兵衛」が演じられた。まず、東家樂燕の浪花節「赤垣源蔵」が演じられ、続いていよいよ「五兵衛と六兵衛」が開幕した。この様子を、同年5月に発行された『日本魂』は次のように伝えている。



日本魂社創立15周年の余興 記念式典の会場となった日比谷公会堂で、五郎一座が「五兵衛と六兵衛」を演じ、喝采を浴びた

も分ち合ふ美しい心でありながら、思ひも寄らず六兵衛が十萬圓の大金が流れ込むと聞いただけで、直ぐに其の親交が弊履の如く抛たるる実相は、五郎と蝶六の妙技によつて眞に迫るものがあつた。人情の美しさに涙した来会者一同は、更に金とのみ聞いただけで其の友情の冷やかなるさまに對してより多くの憎悪を感じた」

この記念大会の3日後、5月2日に五郎は後藤武夫の招きに應じて、夫人を伴つて武夫の自宅を訪れている。二人の親交はことのほか深かつたようだ。しかし、翌年に入つて武夫は体を病み、33年2月、この世を去る。34年9月をもって『日本魂』も廃刊となつたが、この最終号まで五郎の脚本は掲載され続けた。

五郎は48年3月、喉頭癌の手術を受け声を失つたが、9月には無声の役者として大阪

中座の舞台に立った。しかし、その2カ月後の11月1日に逝去。享年71歳であつた。翌月の12月1日、「五郎劇」松竹家庭劇「劇団すいとほしむ」が合体して松竹新喜劇が発足した。「松竹家庭劇」は松竹が五郎劇に對抗して28年に旗揚げした座だつた。「劇団すいとほしむ」は、46(昭和21)年5月に、渋谷天外、浪花千栄子らが「松竹家庭劇」を脱退して結成したもので、翌年には後に大人気を博する藤山寛美も加入した。

この「松竹新喜劇」が、戦後の喜劇の新たな潮流となつて、現代に続いている。

後藤武夫は帝国興信所創業の頃から、政治家、実業家、軍人・官僚、文化人など幅広い分野で多くの人材と交流を深めた。その多くが『日本魂』に寄稿しているのだが、曾我廼家五郎ほど多号にわたつて掲載された人物はいなかった。



後藤武夫の自宅で 日本魂社創立15周年記念式典の3日後、五郎夫妻が後藤武夫の自宅に招かれた。前列右より、五郎夫人、曾我廼家五郎、後藤武夫、武夫夫人

近代化と戦後復興の原動力

# 石炭 鉱業

1920(大正9)年に建設された日本工業倶楽部会館の玄関屋上に置かれた坑夫と織女の像。

当時の二大工業であった石炭 鉱業と紡績を象徴していた。もう日本から坑夫の姿は消えたが炭 鉱の記憶までを消してはならない。

初期の炭 鉱は九州北西部に  
明治維新後、北海道で開 鉱が進む

石炭 鉱業の歴史は、室町時代の1469年、農民・伝次左衛門が福岡県の三池郡稲荷(とうか)村で「燃ゆる石」を発見したことに始まる。後の三池炭 鉱である。その後福岡県内では、78年に遠賀郡、87年に田川郡で、また、1600年代には長崎県の松島、高島で、1700年代に入って佐賀県の唐津でと、石炭は九州北西部で続々と発見され、掘り出された石炭は薪炭として利用されていた。

1700年代の中期以降は、製塩のための燃料としても盛んに使われるようになる。1853(嘉永6)年、浦賀にペリーが来航してからは、汽船の燃料としての供給も増えてきた。またこの頃すでに、島津藩では溶 鉱炉に石炭を使用していたようだ。

明治維新後、工業化が進むなかで石炭の需要は増大していく。殖産興業を牽引した官営富岡製糸場で蒸気機関の燃料となったのも石炭だった。政府は積極的な石炭政策



坑夫と織女の像 1920年に建てられた社団法人日本工業倶楽部会館(東京都丸の内)の玄関屋上に、当時の二大工業を象徴する石炭坑夫と紡績織女の像が置かれた。2003年の改築後も二人の像が建っている

を進め、北海道の炭 鉱開発にも乗り出した。74(明治7)年、アメリカの地質学者ベンジャミン・ライマンが夕張川上流に石炭層の存在を推定。79年には空知郡の三笠市に官営幌内炭 鉱が開 鉱した。ライマンの調査に随伴していた坂市太郎は88年、「夕張の石炭大露頭」を発見し、夕張は「大炭 鉱」に成長していく。また、北海道はもうひとつ、道東の釧路にも良質の大炭田を擁していた。

明治期から戦中まで増産、増産  
戦後は早期復興の原動力に

炭 鉱は明治初期の一時期に官営となったことがあったものの、各炭田で炭 鉱開発の主役となったのは、主に地元の有力企業や財閥であった。大日本帝国憲法が制定された1889(明治22)年頃から、九州では主に三井・三菱両財閥が炭 鉱の取得や開発を推し進めた。この年、北海道では北海道炭 鉱鉄道会社(後の北海道炭 鉱汽船、通称北炭)が発足、官営幌内炭 鉱の払い下げを受け、以降も空知炭田、夕張炭田を擁するいわゆる道央の石狩炭田は主として北炭により開発が進められていった。

全国の石炭の産出量を見てみると、明治10年代の終わり頃には全国で約130万トンであったものが20年代には500万トンを超える。明治末期には約1,800万トンに増え、大正中期に3,000万トンを突破。その後も産出量は増え続け、第二次世界大戦中には約6,000万トンに達した。この間、産出量の大半は九州産であった。戦後は最盛期の約3分の1にまで落ち

夕張石炭の歴史村・石炭博物館のジオラマ展示



旧三井田川炭鉱の二本煙突 高さ45.45メートルの排煙用巨大煙突。炭坑節に歌われ、全国の盆踊りの楽曲としても親しまれている。この写真は、1964年の閉山時のもの

込んだが、1946（昭和21）年12月、第一次吉田内閣により早期の経済復興を達成するために傾斜生産方式が採られ、この石炭・鉄鋼の増産に重点を置いた経済政策により、50年以降は5,000万トンの水準にまで回復をみせる。この政策により、日本は戦後復興を成し遂げたのだが、以後、石炭鉱業は急速に衰退していくこととなる。

## エネルギー革命と輸入炭により 1960年代から急速に衰退

1950年代に中東などで大油田が発見され、60年代には燃料の主役が石炭から石油に移行する。いわゆる、エネルギー革命である。また、石炭自体も高品質、低価格の輸入炭にとって代わられる。石炭鉱業は深刻な構造不況に陥り、相次いで炭鉱が閉山に追い込まれていく。

1955（昭和30）年に制定された石炭

鉱業合理化法により、筑豊炭田にはいち早くその影響が現れた。低効率の中小炭鉱は多くが閉山し、59年には産出量日本一の座を石狩炭田に明け渡した。

その石狩炭田は製鉄用コークスの原料となる良質な瀝青炭を産出し、夕張炭鉱を中心として60年代に最盛期を迎えるが、70年代に入ってからはこちらも閉山が相次ぐ。北炭は75年以降95年までに夕張、空知両炭田の炭鉱を閉山し石炭鉱業から完全撤退した。ここに石狩炭田は消滅する。九州では、三井三池炭鉱が国の保護政策のもとで採炭を続けていたが、97年に閉山した。

最盛期には全国に800カ所もあった炭鉱の内、今も存続しているのはただ1カ所、地元企業数社が2002（平成14）年に閉山した釧路の太平洋炭鉱を縮小して引き継いだ釧路コールドマイン」だけとなった。

## 産業遺産と炭鉱（やま）の記憶は 日本の石炭を語り続ける

およそ1世紀の間に沸騰し消え去った日本の石炭鉱業。しかし、かつて日本の産業の原動力であった筑豊、三池、夕張など旧産炭地では、その遺産が近代化産業遺産群に認定されている。筑豊の旧三井田川炭鉱の二本煙突は昨年、関連遺産とともに世界遺産暫定リストに記載された。二本煙突とは「月が出た出た月が出た 三池炭鉱の上に出た あんまり煙突が高いので（略）」と、あの炭坑節に歌われた煙突である。

しかし、かつての産炭地の活性化は他の産業にくらべて容易ではない。特に、閉鉱に

よりにわかに産業や街が起こり、閉山後は新たな産業を興しにくい山間の産炭地は深刻である。夕張市では、人口は最盛期の10分の1に落ち込み、超高齢化も進んだ。

空知地域で活動するNPO法人「炭鉱（やま）の記憶推進事業団」の吉岡宏高理事長（札幌国際大学観光学部准教授）は語る。

「炭鉱は暗いというイメージがある。マスコミが来るのは事故や閉山の時だけで、人々が涙を流す映像しか撮らなかつたから。そこでまず、誇りの回復が急務だ。炭鉱が果たした役割、地下、1000メートルで働いた体験、そういう誇りを夕張の財政破綻などで全国の注目が集まっている今こそ、外に向かって自慢することだ」

炭鉱には事故や労働争議などつらい体験が付きものだが、夕張石炭の歴史村・石



夕張炭鉱の鉱員たち 1957年、全盛時代を迎えていた夕張炭鉱で作業場に向かう鉱員たち。安藤文雄氏撮影

炭博物館・案内人の山村光男さん（74歳）が30年間の鉱員生活でまずは、働き甲斐があった



山村光男さん（博物館説明員）18歳から閉山までの30年間、夕張の鉱員として勤め上げた

こと、住宅や光熱費など福利厚生が充実して暮らしやすいことが、毎日元気に緒に坑内に入った同僚たちとの友情だという。最盛期には歩くのもやっとなというほど街も賑わっていたそうだ。

同博物館を管理する夕張リゾート株式会社の企画課長・青木隆夫さんは

「幌内炭鉱が開鉱して鉄道が敷かれ、ここが北海道開拓の前線基地となった。鉄道は室蘭に伸び、北炭はここに製鉄所（現、新日鐵室蘭製鐵所）を作り、船舶は三井船舶（現、商船三井）に引き継がれた。夕張は今も、今日までの日本の産業の命脈のなかにあるのです」

と、夕張の歴史を評価する。有形の産業遺産に加え、こうした炭鉱の記憶という無形の財産の上に旧産炭地の活性化が進めば、日本の石炭が果たした役割はその証とともにずっと語り継がれていく。

日本工業倶楽部会館は2003（平成15）年、解体・改築されたが、坑夫と織女の像は現在も日本の産業と同倶楽部のシンボルとして、新会館の玄関屋上に置かれている。

## 帝都の復興は困難かと 思われた未曾有の大震災

1923(大正12)年9月1日午前11時58分、東京から西へ80キロ程離れた相模湾の西北部を震源地としたマグニチュード7.9の激震が関東一円を襲った。地震後に発生した火災を含め、この震災による死者数9万9,331人、行方不明者4万3,476人、家屋の焼失、全半壊約70万戸。この関東大震災がもたらした被害は、現在でもわが国災害史上最大のものである。

当時の記録は、様々な形で今に伝えられているが、帝国データバンクでも震災を経験した2人のOBに当時の記憶をインタビューしている。

震災時、文書部に所属していた唐須皓次氏は、当時レンガ造りだった本社ビルが激しい震動で崩壊する様子を目の当たりにした。94年に行ったインタビューでは、余震が続く中で人命救助に当たったことやその後の火事で母親を亡くし、同僚の消息もしばらく分からなくなったことなど衝撃と混乱の様子を語った。

発送部勤務の小出金市郎氏は、震災後の避難生活で、まだ焼け跡に熱さや焼死体が残る中、2晩ほど野宿した日比谷や上野の様子を次のように証言している。

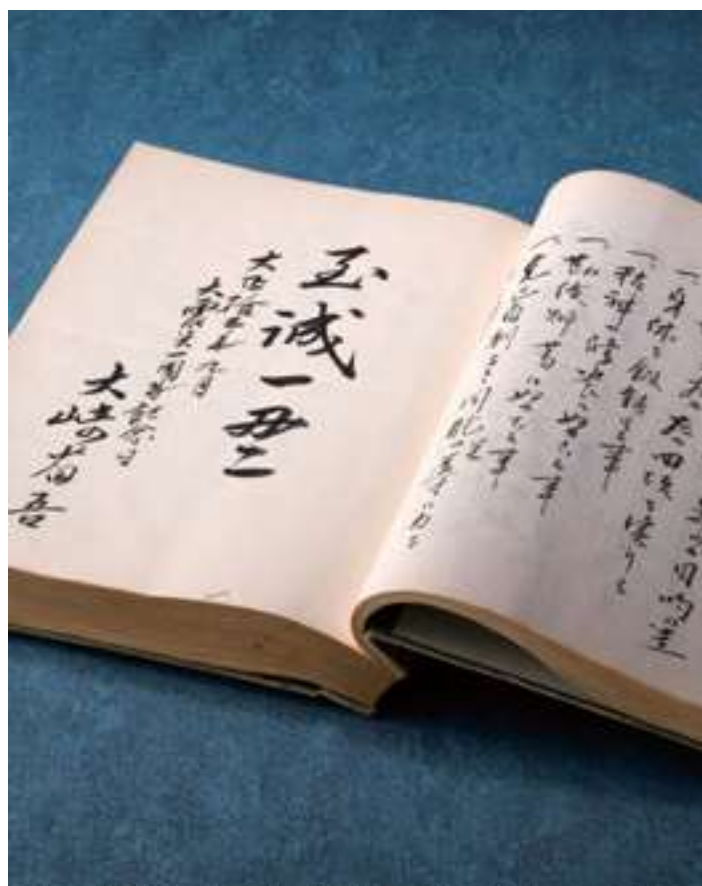
「地震の時に誰も消火する人がいなかったのですよ。上野の西郷さんの銅像前から見渡すと、本当に東京全部が焼けていて、もう再興は難しいのではないかと思いますね」  
(2004年・談)

### シリーズ | 史料との対話

## 「震災手記」に見る 復興への想い

帝国興信所では、関東大震災1周年を期して被災地の所員から提出された208通の所感を1冊の「震災手記」に綴っている。そこには全編にわたって自らへの戒めや帝都東京の復興への決意や想いが記されている。

今回は、この「震災手記」と同日付の東京朝日新聞の記事をもとに、力強い東京と市民の姿を眺めてみた。



事実、地震後の火災は、3日の午前7時頃まで42時間燃え続け、戸数の約7割、東京の2分の1を見渡す限り焼野原に変えた。一時は首都機能の移転も考えられたほど大打撃を受けた東京であったが、その後目覚ましい復興を遂げていく。

### 震災からわずか1年で バラックにより約7割復旧

東京の急速な復興ぶりについては、震災からちょうど1年後の1924(大正13)年9月1日付東京朝日新聞から見て取れる。

1面には、永田東京市長による震災記念日を迎えるの感想が掲載され、東京の復興について、次のように述べている。

「とにかく、今日バラック廿萬を建設し戸口共に凡そ七割の復旧を見たのは、市民の努力によるものである(中略)復興計画に対する国庫の補助は前例のないもので寛大である。従って吾々市民はかうした恩



東京市長の震災1周年の感想を載せた記事(『東京朝日新聞』1924年9月1日) 震災後の多事多難な1年を振り返り、さらなる復興への努力を市民に呼び掛けた



典に対しても一層十二分に努力せねばならぬと思ふ」

震災から1年間で、各地の復興は急ピッチに進んでいた。かつて焦土と化した東京の街並には、8月時点で17万7,859戸のバラックが立ち並び、また、都市としては初となる区画整理事業に向けた道路の測量など、着々とその準備が進められた。また、横浜でも、1万5,274戸のバラックを建設。空き地が見当たらないくらいに建ち並んだ家屋からは、どこにいても槌の音が聞こえるほど、いたる所で復旧工事が行われていた。

こうした復興には、経済も大きく左右している。当時の農務省が6月末時点で行った京浜の商業復旧調べによると、東京で従前以上に隆昌したものと、青物商や豊表花笠商、足袋商、洋服商などを挙げ、横浜でも食糧鳥商類や材木問屋などの増加が示されている。震災直後、被災地では政府からの配給や全国から送られてくる救援物資に頼らざるを得ないほど食料不足



震災1年後の復興の様子を取り上げた記事(『東京朝日新聞』1924年9月1日) 政府と東京府(東京市)、神奈川県(横浜市)が一体となり、復興事業は進められた



新橋から京橋方面を望んだ震災1年後の街並 写真中央に見えるのは、尾張町(現・銀座4丁目)交差点。震災後1年で隙間が見あたらぬほどのバラックが建てられていた

に喘いでいた。そこから1年でバラック造りの露天商から必需品店までが建ち並び、うになり、流通機能もめざましい回復を遂げていた。

### 震災1周年を期して 所員の所感を「震災手記」に

この日、帝国興信所では、大震災火から1年を期して東京本所と横浜支所の所員208人が記した所感が後藤武夫所長に提出された。この所感後は後に一冊の手記と

して綴られている。所感の内容を見てみると、まず目につくのは、震災から1年を経た東京の復興ぶりについてのものである。

「然るに二年後の今日ころ焼野原はどうなったことか。昔の面影は変わったけれど、皆旧体に復したのである。元家ありし処は少数の例外を除いて殆んど皆災前の如く大小の家々が立ち並んだ」 (文書部 中山常雄)

「災後一ヶ年の今日に於ける文明都市の再建、各被害地の復興の勢いは又凄まじく大自然の暴威に反抗して、其の進歩を見たるは誠に『人間の力』の強大なるを思はしめて、更に更に驚嘆する處であります」 (調査部 寺島恭一郎)

また、具体的な数字を示して社業の復興ぶりを記したものもある。

「災後一ヶ年平均一ヶ月の成績は1万8702円なるが、之を災前の同上2万7286万円に比べ68.9%に相当せり。即ち亦約7割の復興を尽くしたるもの言つて得べきなり。今余は震災直後災害を見舞ふべく吾所焼跡に至りし時、当分回復の見込なきに依り所員各位は云々の立札を觀て悲痛を感じたるを回顧し当時一周年に今日あるを想像せざり」 (統計部 二瓶士子治)

### 所員の復興への決意は 被災地市民の想いの縮図

震災1周年の1924(大正13)年9月1日は様々な記念行事が行われた。そのひとつに「震災共同基金募金デー」がある。東京朝日新聞の記事によると、この基金デー

この所感では、当分回復が見込めないと思われた帝国興信所が、1年の間に震災前の約7割まで成績を回復させたことから、コンクリート建てのビルを仰ぎ見るのも遠くないという意気込みも書かれていた。事実2年後の1926(大正15)年には、倒壊した旧本所社屋跡地に堅牢な鉄筋コンクリート造の新社屋が建てられた。



二瓶士子治氏の所感 震災前と震災後の帝国興信所の1ヶ月平均の成績を使って、具体的な復興程度を記している

は「二周年前を想ひ起して不時の災害に対する不断の用意を怠らぬように国民的注意を促すための計画」とある。この計画に沿って当日、朝日新聞社は60万枚のピラを配布しているが、帝国興信所の所員もまた別のピラを市民に配っていた。

この運動の一端を記した所感がある。震災の体験を語った前出の小出金市郎氏はこの日、命じられた場所に立って道行く人々に宣伝ピラを配ったことを記している。

「吾等教化団体の宣伝する国民精神作興や勤儉貯蓄は深く人々の頭脳裡に沁み込んだらと思ふ」



「震災共同基金募金デー」を取り上げた記事（『東京朝日新聞』1924年9月1日）  
震災1周年を期して市中の至るところで、様々な団体によりピラが配られた

ここにある教化団体とは、22年に教化活動を目的として発足した「大日本教化團體聯盟」（後に「教化團體聯合会」に改称）のことである。当時、帝国興信所所長であった後藤武夫は、この団体の理事を務めていた。震災直後より精神文質両方面からの復興運動を唱えていた同団体は、24年の9月1日付東京朝日新聞に次のような広告を掲載し、その活動を訴えている。



「教化團體聯合会」による国力振興運動の広告（『東京朝日新聞』1924年9月1日）  
当日は、永田東京市長が会長を務める「東京震災記念事業協会」の募金募集広告も掲載されていた

こうした背景もあつてか、「震災手記」には、今後の生き方や暮らし方、働き方に対する所員の決意を書いたものが多い。前出の唐須皓次氏は、次のような所感を残している。

「自己の生存を神佛に心から感謝し絶対に奢侈贅沢を斥け（中略）我が所の為めにより以上の奮励努力を為し以て我が所の挽回を図ると共に国力の振興に務めたい」

このようにほとんどの所感には、生き延びたことに感謝し、常日頃より「勤儉貯蓄」「質実剛健」「至誠努力」に努めようとする決意表明が記されている。

「吾々は其記念日と共に奮起して大に努力して国力増進を計り九月一日により覚醒して  
「浮華放縱の悪風に慣習せざる事  
「質実剛健に志て能く勉め能く蓄へる事」 （調査部 加藤守末）



小出金市郎氏の所感 教化団体の宣伝活動について「意義ある宣伝に従事し得た事を無上の幸福とし光榮としている」と記している

「国民精神作興並に国力増進運動の声に和して質素勤儉貯蓄の美風を守って女性として日本国民の一員と志してしつかりした目標に向つて勇敢に突進し国難に瀕せる現地より脱せしむる覚悟」（文書部 横山つね子）

「震災手記」のすべてを読みとおして見ても、個人的な要望や不満を記したものは、1通も見当たらない。すべては震災前の反省と国家や東京、そして社業の復興に想いをよせたものばかりである。

関東大震災は帝都東京に壊滅的な打撃を与えた。しかし、11日後の9月12日には「帝都復興の大詔」が喚発され、東京は帝都として復興されることとなった。その4カ月後には、早くも本格的な再生事業がスタートしている。財団法人東京都慰霊協会発行の『関東大震

災」ではその理由を次のように記している。  
「当局の献身的な昼夜兼行の努力と、市民その他の熱烈な協力と強い声援があつたらであつたと思われます。」

「帝都復興の大詔より、9年後の32（昭和7）年5月には土地区画事業を軸とした全ての事業が完成し、近代都市東京として生まれ変わった。帝都復興への総事業費は、総額約7億3,000万円という莫大なものであったが、市民を挙げての決意や想いもまた、強大な力となっていたことは想像に難くない。

「余輩は一年一回と之を限らず毎月否毎日之を記念してこそ始めて真に意義あるものなる事を当時を追想してえたる感想に有之候」（人事部 吉川收藏）

関東大震災の記憶を語る事ができる人々はもう殆どいなくなった。しかし、手記のひとつひとつは、決意や想い、自戒の念をこの先もずっと語り続けていく。



「帝国データバンク史料館」バーチャルリアリティ展示 「震災手記」に綴られている所感、VR（バーチャルリアリティ）展示やデータ検索ブースで閲覧することができる

## 「大家族主義」を実践した清遊会 一糸乱れぬ団結で淡路島の絶景を堪能

右の写真は、1930（昭和5）年に帝国興信所大阪本部で行われた清遊会の様子を撮らえた一枚である。清遊会とは、休日を利用して行われていた帝国興信所の社員旅行などの催しにつけられた呼び名で、昭和30年代前後まで全国各支所ではしばしば行われていた。この時の清遊会では、東京より加わった所長の後藤武夫も含め、参加者300余名を集め、蒸気船「華城丸」を貸し切って淡路島の洲本に出かけた。

午前8時に大阪から出航した一行が向かったのは、洲本町（現・洲本市）の三熊山である。三熊山の山頂には、この清遊会が行われる2年前の1928（昭和3）年に、昭和天皇の即位を記念した天守閣の模型が建てられていた。16～17世紀にかけて、この地には豊臣秀吉の武将である脇坂安治が築城しており、その後基礎石だけが残った状態になっていた。その上に建てられた天守閣の模型は、当時大阪地域にパンフレットが配られるなど観光スポットになっており、現在でも洲本城（三熊城）として残されている。

清遊会の一行は、正午を過ぎた頃に目的地である山頂に到着した。洲本市街地から大阪湾、紀淡海峡を挟んで和歌山まで見渡すことのできる絶景を前に、所長による挨拶と万歳三唱等が行われ、式典の後には各自で自由行動を取ることになった。小説家の谷崎潤一郎がこよなく愛し「藝食う虫」



の舞台として取り上げた美しい景色に囲まれ、所員も付近の探勝を楽しんだ。

帝国興信所の創業時、所長の後藤武夫は「脱俗主義」「至誠努力主義」「大家族主義」の3つを経営理念に掲げ実践してきた。当時、掲げた経営理念は、帝国データバンクとなった現代でも経営信条として脈々と受け継がれている。世界恐慌の煽りを受け閉塞感が蔓延する中で、社内の融和を図るために行われた清遊会の写真は「大家族主義」を実践した1枚といえる。

## 史料館 TOPICS

### 『中国档案報』で 特別企画展の記事を掲載

2009年1月8日付の『中国档案報』に、帝国データバンク史料館を取り上げた記事が掲載された。『中国档案報』は、中国国家档案局が発行している定期刊行物である。同局は、中国のあらゆる公文書や公的記録、企業関連史資料を統括的に管理している。今回の記事には、昨年の6月に開催した特別企画「日本会社展第1回 老舗—温故知新—」で取り上げた長寿企業のアンケート結果などが掲載されている。帝国データバンク史料館のホームページ上でも公開しており、日本語訳も閲覧できる。



## ご利用案内

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。  
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

<http://www.tdb-muse.jp/>

## 開館のご案内

[開館時間] 10:00～16:30(入館は16:00まで) [休館日] 土・日・月曜日および祝日 / 年末年始(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。) [入館料] 無料

## 交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅から徒歩8分 / 中央線 四ツ谷駅四ツ谷口から徒歩9分

[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分 / 都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分 / 丸の内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分



帝国データバンク史料館だより Muse Vol.08 2009年4月発行

<http://www.tdb-muse.jp/>

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL. 03-5919-9600(直通) ※ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。